



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のころ通信は、町民の皆さんがお話した「ころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ったまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。

※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のころ通信/第95号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のころ通信」宛て
FAX.0240(34)4593

再取材シリーズ

再会・浪江のころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から8年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど、皆さんの声をお届けします。



島田 有紀さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 佐藤
取材日：2月9日

ソフトボールの仲間や町内の皆さんとお会いする時間を大切にしています

島田さんの取材は2回目で、第54号(平成27年12月号)で取材した時には郡山市に暮らしていましたが、勤務する「福島さくら農業協同組合」の転勤で浪江支店に配属されたのを機に、平成29年10月から浪江町のご自宅暮らしです。また、浪江町ソフトボールチーム「SSB」に所属し、浪江町のソフトボール代表メンバーでもあります。島田さんのお話からは、人とのつながりを大切にしながら故郷で前を向き、仕事にソフトボールにと、実直に取り組んでいる様子が伝わってきました。



▲愛用のソフトボールのバットと一緒に撮影しました

◆震災当時から現在まで
震災時は双葉町に勤務中でしたが、母と電話ですぐに連絡を取り、合流しました。父は役員職だったため、業務で町民を避難先に誘導するため、家族から離れていました。最初は、車で高台まで避難し、浪江中学校の校庭で車中泊をし、藤橋の母の実家に2泊ほどした後、母と母方の祖父母と4人で、いわき市の好間公民館に避難しました。その後は、私は茨城県ひたちなか市に、母は東京に、祖父は埼玉県久喜市にと、それぞれ家族や親戚の家に避難し、バラバラでした。約1か月後に二本松市の借上アパートで父も合流し、ようやく家族で一緒に暮らすことができるようになりました。

私は2か月後に仕事を再開し、福島市、郡山市や広野町(いわき市在住時)勤務を経て、平成29年4月からの浪江支店再開に伴い支店配属となり、浪江町に戻りました。父が自宅をリフォームしてくれ、家具や内装を全て取り換えて、今は実家で暮らしているところです。父は役場を退職後、町商工会に5年間勤め、そちらも退職し、現在は「叔母のそばにいられるように」ということで、父と母のんびりと郡山市で暮らしています。

◆浪江町に暮らして感じること
町内で飲食店は再開しているのですが、スーパがなくなり、普段の買物は南相馬市原町区や富岡町まで行かなくてはならないので大変です。あまり、町民が戻って来ていない状況ですが、自分の出身地、そして自宅に住めるという安心感があることはよかったです。また、避難先では雪で苦労したので、浪江の穏やかな気候は、やはりうれしいです。

町では、建物の解体が進んでいる状況で、車で通ると「ここに何があったよな」と、昔を思い出して懐かしく思うときがある一方、建物の再建や農業の再開なども進んでおり、町民の皆さんが帰りやすい環境を整備するため、みんな頑張っています。ちょっと大きな夢かもしれませんが、年に一度だけでも、町民の皆さんに町の様子を確認に戻って来ていただき、懐かしんでいただけたらと思う気持ちもあります。

◆ソフトボールの仲間や町でお会いする方と過ごす時間を大切に
小・中・高等学校とずっと野球をやってきて、18歳の時にソフトボールを始めました。町のソフトボール大会に参加した時に「SSB」に誘ってもらい、入ったとしても雰囲気の良いチームで、メンバーとは大会以外でも、忘年会、新年会などで集まる時にも楽しく過ごさせてもらっています。みんなに会うと、浪江を感じるができます。

今、町内に勤務していると、やっぱり知人や馴染みの方などに会うことができるので、昔を懐かしく思い、「今どうしてるんだ？」と話す時間がとても大切に感じられますね。あとは、ソフトボールの市町村大会が年1回開催され、こうした状況でも浪江のメンバーが集まり、合流して飲んだり話したりする時間は楽しい時間で、「自分の今の支えかな」と感じています。

きさら942
八幡 喜美男さん・万里子さん(室原)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ 菊池
浪江町復興支援員 中嶋・森
取材日：1月22日



「きさら942」は、嫌なことを忘れて、
笑い笑顔があふれた集まりです

きさら942の代表である八幡さん夫婦は、当初の避難先であった沖縄から、故郷の浪江町に近い北茨城に家を購入し引っ越してきました。浪江町復興支援員の方が訪問した時に、八幡さんからの「家が広いので、浪江の皆さんが集える場として使ってください」という申し出を受け、浪江町復興支援員が中心となり、茨城県の東北地区に、浪江の皆さんが気兼ねなく集まり、定期的に親睦が図れるような場を作りたいという思いで、自治会の立ち上げに向けて、会員の募集や役員への就任依頼などに奔走してきました。何とか会員も集まり、この会の名称を、会の拠点となる会長の八幡さんの自宅の所在地から取って「きさら942」として、平成29年10月に設立し、活動を開始しました。



◆会の活動について
万里子さん 震災後は沖縄に避難して約5年間を過ごし、その後、福島に近い場所の家を探していたところ、この北茨城にいい物件があったので購入しました。
浪江町復興支援員の方が自宅に訪問してきた時に自治会の話しを聞き、「浪江町に恩返しをしたい」、「町民の皆さんに「くつろげる場」を提供し、くつろいでほしい」という思いから、主人が会長職を引き受け、自分が全面的にサポートしていくことにしました。
活動内容は、毎月定例会を第2水曜日に開いて、会員の皆さんが集まり、お茶を飲んだり、お菓子を食べたりしながら、浪江町での思い出、避難先での出来事、今の暮らしぶりなどを話しながら過ごしました。設立当初は、参加する人は多くありませんでしたが、会員の皆さんが友人や仲間を誘ってくれたりしたので、北茨城市だけでなく、いわき市などから参加してくれる人もいて、だんだん増えてきました。
活動を開始して半年ぐらいい過ぎたころには、参加者も徐々に増えてきて、毎回20人ぐらいの浪江町民が参加してくれるようになりましたが、ただ集まって飲み食いしながら話すだけで

は物足りなくなり、経済産業省の補助金を活用し、つるし雑・ちぎり絵・折り紙・絵手紙・竹細工などを、講師を呼んで指導してもらいながら作品を作ったり、ビールの空き缶を使って風車を作ったりし、出来上がった作品は「十日市祭」にも出品して、大変好評を得ました。
また、パーベキュー、忘年会、新年会なども企画し、参加してくれる会員も増えていきます。



▲つるし雑を作っている様子など



【前列】
藤橋 吉田 充雄
藤橋 吉田 範子
権現堂 佐藤 キミ
高瀬 齊藤 たか子
川添 高木 一子

【後列】
支援員 中嶋 敦栄
支援員 森 美恵
室原 八幡 喜美男
原 八幡 万里子
田尻 木幡 信子

会に対する思いや
浪江について思うこと

●八幡喜美男さん

とにかく、参加してくれる皆さんにくつろいでほしい。皆さんに喜んでもらえるのがうれしい。

●八幡万里子さん

浪江町で居酒屋を営んでいたが、震災により自分の生きがいで、目標だった仕事を奪われたことが一番ショックだった。でも、過去を振り返るだけでは前に進めないで、それは腹の奥にしまっただけで、浪江に恩返ししたい。そして平穏無事な生活にたどり着きたい。それだけです。

会員の皆さんの声

●八幡さんに誘われたのがきっかけで参加するようになった。
以前は、この北茨城に浪江町民の人たちが集まる場がなかった。この会ができてありがたい。

●震災後には、周りの人からの心無い言葉で嫌な思いやつらい思いもしてきたが、このような町民同士の集まりでは、同じような経験をしてきた人

●斉藤さん

みんなが集まれる場所を作っていたら、八幡さんにもこのような場を提供してもらい、この会があるから笑顔で元気でいられることができるのでありがたいし、あとは前を向くしかない、前を向くしかないです。

●吉田範子さん

8年前の震災以降、子供ともバラバラになってしまった。今は浪江町にある家も取り壊されてなくなりました。でも、この会に夫婦で参加させていたかったので、息抜きできるし、家に帰ってからも夫婦で会での出来事を話したりできる。浪江のことを考えてもしょろがないし、諦めているので、ここで頑張るしかないという気持ちです。

●高木さん

人は浪江に帰れ帰れと言うけれど、震災前の浪江に戻して分かっていくけど、無理なのは分かっていくけど…。
この会に入って生き返った。

●木幡さん

言っても何も変わらない、考えてもどうにもならないので、ここで穏やかに暮らしたいと思っています。

●佐藤さん

今は家も壊してしまったので浪江に対して心残りはないが、家があった場所に行くのが

でも今は、この「きさら942」に参加できるようにだったので、ありがたい。
以前は「勿来プロジェクト」というのがあり、そちらに行っていたが、援助が打ち切られたので、私たちは行き場がなくなりました。そんな時にこの「きさら942」ができてよかった。

●日立市や東海村には、このような集まりがあるのを知っていたが、少し遠いので参加できなかったが、この北茨城で参加できてよかった。

●吉田充雄さん

この会が活動し始めた当時は、こんなに長く続くとは思っていませんでしたが、今はこの会をできる限り長く続けてほしいし、町民の皆さんが集まる「場」を提供していただいている八幡さん夫妻の気持ちが大変ありがたい。

●皆さん

毎回、会長の八幡喜美男さんが手作りの汁物料理を振舞ってくれるが、これが本当に楽しみです。本当にありがたいです。

